

税理士志望が アナウンサーに

～転機は赤面症克服～

文化放送・編成局制作部

専任部長アナウンサー 寺島 尚正さん



(写真提供=文化放送)

午後3時半になると文化放送(AM1134)から、♪♪てらちゃん寺ちゃん♪とノリのいい歌声が流れてくる。ベテランアナウンサーの寺島尚正さん(54)がメインパーソナリティーを務める情報番組『夕やけ寺ちゃん 活動中』(月～金、午後3時半～5時50分)の始まりだ。最新ニュースを分かりやすく解説する寺島アナは中央大学商学部出身。マスコミ志望ではなく税理士志望で入学した…。

(学生記者 宮寺理子=法学部3年、山下緑=総合政策学部3年)



赤面症だった

中大では資格取得サポートの「経理会計研究会」に所属し、仲間とともに税理士や公認会計士になる勉強をしていた。簿記2級取得はこのころだ。このまま進むと税と会計の専門家になる。「でも何か違ったんですね。ほかの学生がすごく優秀だったことも関係している」。居心地の悪さなのか。関心はほかに向けられた。

「私、赤面症でして。克服するためにアナウンス学校へ通うことになりました」

軽妙洒脱な語り口の今しか知らない人にとっては信じられないが、人と話

すのが苦手だったという。アナウンス学校には大学3年秋から通い始めて1年間勉強した。授業料はアルバイトで稼いだ。

受講生は女子28人に対し男子は2人。アナウンサーといえば女子アナの世相を映し始めていた。授業は発声練習から始まり、滑舌よく、分かりやすく話せるまで続く。「少しずつ進歩しているよ」。ある日、講師に褒められた。他の受講生はほかにやりたいことがあったのか人数が少なくなっていくなか、「払った授業料の分だけ勉強しようと思って」。

通い続けた成果は教育実習に現れ

た。母校の東京・佼成学園高(男子校)で教壇に立ち、社会科を教えた。実習終了後、生徒40人にアンケートをとった。「私の授業、どうでしたか」。

「先生、アナウンサーになればいいよ」「アナウンサーみたいに堅い感じがした」「滑舌がよかった。こ・ん・に・ち・は…の分かりやすい話し方がいい」

新しい道が開けた。「劣等感はやりがいいタネです。うまく出来たときの喜びは、ほかの人の倍どころじゃありませんよ。弱点は悪いことではない、私にはエネルギーになった。教育実習でアナウンサーになれるかなと思いました」。入学当初に抱いていた税理士志望は後退



本番で使用するスタジオを見学させてもらった。寺島さんを中央に、左は山下、右が宮寺

していった。

初対面でも本音を聞き出す

文化放送アナとなって、「外回り」と呼ばれる街頭インタビューを始めた。初対面の人にラジオ放送を理解してもらい、話を引き出すには大変な苦労がある。「相手はバリアーを張っているからね」。どうするかというと、「その人のいいところを見つけて入っていきます。タレントのマツコ・デラックスさんを思わせるような体格の人に、痩せていますねとは言えない。健康的ですねと言えば、放送にふさわしいし、反応

が違ってきます」。外回りは二十数年続いた。

スタジオから発信する立場が変わっても、リスナーと一対一の関係は変わらない。「ラジオをお聴きのかた、あるいはラジオをお聴きのあなたと言うようにしています。リスナーは“あれ今オレのこと言ったかな”と思ってくれる」

リスナーとの距離が近い、ラジオの存在感がここにある。

情報を提供、判断はリスナー

現在の担当番組の一つ、『夕やけ寺ちゃん 活動中』では、ニュース解

説のコメンテーターが幅広いジャンルから登場する。

岩上安身氏(月曜・ジャーナリスト)、門倉貴史氏(火曜・エコノミスト)、木下博勝氏(火曜・医師で現役女子プロレスラー、ジャガー横田さんの夫)、荻原博子氏(木曜・経済ジャーナリスト)、尾木直樹氏(金曜・教育評論家)、三橋貴明氏(金曜・経済評論家)。

独特の語り口で「尾木ママ」とも親しまれている尾木法政大教授からは、大津の男子中学生自殺いじめ問題で専門家ならではの貴重な意見を引き出した。のちに大津市から真相解明に向けて市が設置した外部有識者による第三者調査委員会メンバーを委嘱された。

寺島アナは、コメンテーターの専門性を尊重しながら、リスナーに分かりやすい表現を心がける。「情報は世の中にいくつもある。それを提供し、番組では意見も言う。どれを選ぶかはリスナーです。リスナーの判断材料として情報や意見を提供していく」。

「これは中大生にも言いたいな。人の意見を聞く。いろいろな人の考え方を知る。その時それホントなの? と疑問を持つ。批判する力を持ってほしい。短絡的に決めないでほしい」

毎日続ける定点観測取材

多忙な毎日だ。ナマ放送の番組の前後の時間を使って取材に走る。最近は大塚スカイツリー(東京・墨田区)を定点観測中。取材して分かったのは、周辺にゴミ処理問題が起きていた。自転車の放置にも困っている。収益をもたらす観光客はマイナス要素も併せ持っている。寺島さんの取材はスカイツリー営業



開始時の報道だけでは終わらない。根気よく続けるひたむきな取材がリスナーに好評だ。

日々の取材のほか、日替わりで招くコメンテーターやゲストの著作を次々に読み、HPやブログもチェックするとアツと言う間に時間が流れていく。

「楽な仕事なんて、ないですよ。いいなあとと思う仕事ほどつらいのです。大切なのはラジオを聴いた人が喜んでくれること。相手に有用な情報を伝え続ける。」

◇アナウンサー、テレビとラジオの相違点

	テレビ	ラジオ
対象	視聴者	聴取者
意識	画面	音声・言葉
工夫	見せ方	明瞭

プロになって分かりました。忙しいと言うのは言い逃れです」

自らにさらに負荷をかけた。ファイナンシャル・プランナー(FP)の資格取得にチャレンジした。7月、「3級FP技能士」試験に合格した。番組火曜日のパートナー、福田萌さん(元ミス横浜国立大学、ツイッターアイドル)が同時期に「2級FP技能士」に挑戦して合格したのが刺激になったようだ。

「54歳のおっさんが挑戦する。頑張れって言うってくれる人もいるし、不合格なら笑ってくれてもいい」

税理士から遠ざかったのにFP資格取得とは何かの因縁だろうか。50歳半ばからのチャレンジャー。次は2級取得

を目指す。その生き様は、まさに番組のタイトル「夕やけ寺ちゃん 活動中」である。



浜松町にある文化放送



取材後記

批判と非難の違い

「毎日現地に取材に行きます。自分一人で行き先から何から自分で決めて」

ラジオアナウンサーといえば、ラジオブースでヘッドフォンを付けて話をしているといったイメージの人も多いのではないだろうか。

しかし実際は違った。寺島さんは毎日、生放送前に話題の場所に自ら足を運び、自分の目で見たもの、聞いたものをリスナーに伝えている。

「例えば昨日は押上に行きました。東京スカイツリーがオープンする前から観察しているのですが、オープン後はお客さんの層も変わりました」

どのように変わったのだろうか。

「地元の商店街にもお客さんが流れてくると思っていたけれど、実際はそうではなく、ゴミが捨てられたり、夜には若い人が来て騒いだりと、地元の人が最初予測していたものとは違う動きになっているようです。今後どうなっ

ていくのかも伝えていこうと思っています」

地元の人に積極的に話しかけ、東京スカイツリーの撮影ポイントや上手に撮るコツを教えてもらったりもするという。

●バリアーを解く

そんな寺島さんの初対面の人に話しかけるコツとは？

「褒めるってことが大事だと思います。全部を「よいしょ」するって意味ではなくて、ある意味、肯定的に全てをとらえることが大事。初対面の人に話をしてもらう時、必ず相手はバリアーを張ります。そこでどうやって打ち解けていくか、褒める＝肯定する、その人を認めるってことはとても大事。こっちもバリアーを張っていたら、相手は絶対バリアーを解かないので、こちらからまずは積極的に失礼のないように入っていく。そしていいところを見つければ相手だって嫌な気は

しないと思います」

確かに褒められると自然と嬉しくなってしまう。相手をしっかり見て、相手のいいところに気づき、肯定することが相手のバリアーを解くコツのようだ。

だからといって、もちろん、全てを肯定すればいいということではない。寺島さんは「批判」と「非難」の違いについてこう話してくれた。

「批判と非難は違います。何でもやみくもに、いちゃもんをつけるのが「非難」だとするならば、『批判』とはいいものはいいい、悪いものは悪いとしっかりと変わらない基準で言い続けることだと思います」

なるほど。自分の基準で「いいものはいいい」と肯定し「悪いものは悪い」と批判することが、膨大な情報と多様な価値観が存在する今の世の中においても必要なのかもしれない。(宮寺理子)

会社概要

事業は、一般放送(AMラジオ)のほか中波ラジオ・デジタルラジオ・インターネットラジオ番組の制作と販売。マルチメディアのソフトウェアや映画の企画、制作、販売など。社員数110人(男性87、女性23)＝2012年4月1日現在、役員・出向者を除く。本社所在地／東京都港区浜松町1-31(JR浜松町駅北口すぐ)。2006年7月に新宿区若葉から移転した。